

パーリ・アビダンマの特色

柏原 信行

無常・苦・無我が、パーリ仏教の特色の一つであると考えられている。

界 *dhātu* の義に關しても *Vm.* は、十八界を①鉱物が金銀等を生ずる如く輪廻の苦を与え②荷物の如く有情に持たれ③苦をもたらし④輪廻の苦が有情に用意される因となり⑤その苦を保持するものであり、又①自性を保持し②鉱物が岩石の部分であると同様智所知の部分であり③身体の部分であり④非生命であるとし (D. 485 f.)、四大の界を①自相を保持し②苦を受け③苦に左右され④界の相を超えぬものとし、自相と適切な刹那とを保持するから法滅尽の義で無常、怖畏の義で苦、不堅実の義で無我である、とする (p. 368)。三界は *Dhatuk.* の如く四大と共に十八界のいづれかに摂めて解釈する。As. は自性・空・非有情 *nissatta* とする。これは *Vm.* での自性の保持・無我・非生命と同じである。(*nissatta* が無実体ではなく非生命と同義であることは As. p. 38 に並記されている点からも明らかであろう) *Namar-p.* は、自ら自己のみの性として自相を保持するものとし (v. 673) *Vm.* から例を引用している (v. 676)。Abhidh-s-t と *Paramatthadipani,* *Vm-nit.* 等の詳細な定義は *Vm.* と同様である。

北伝論書のうち婆沙論は十八界と①鉱石の如き種族②積み重ねられた段③身中の十八分④十八片⑤異相⑥不相似⑦分齊⑧種々因とし、声論者の①三界五趣四生の馳流②自性の任持③他生の長養

を挙げる (大 27—367 c)。俱舍論は十八界を①鉱石の如き種族②生本 (*ākara*) ③同類因④自性を持つ種類 (*jāti*) であるとし (大 29—5 a AK. p. 13; AKV. p. 45) 大種の界を自相と所造色を保持するものとし (c e a b Abh. p. 8; AKV. p. 32—33. AKV. は種姓と後有を長養する種子でもあるとする) 三界は自相を保持し欲等を任持し (*ādāha*) 種族であるとする (41 a AK. pp. 112—3; AKV. p. 25)。順正理論は十八界を体類が等しくないので種族であるとし (大 29—343 c) 大種の界を出生処とし、自相と所造色を持つ義は有説とし (335 c)、三界については界の義を説かない。瑜伽論では①因②種子③本性④種性⑤微細⑥住持とし (大 30—610 a) 集論は①一切法の種子②自相と③因果性を持ち④一切法の差別の摂持とし (大 31—666。Abhidh-sam. G's ed. p. 15; Ps. ed. 欠) 雜集論は①は阿頼耶識中の諸法の種子③は根境識の次第關係④は界は全て十八界に摂められることを言うとする (大 31—704 b c Abhidh-sam-bh. p. 19)。

この様に、界は鉱石か岩石の部分であり岩石に保持 (*√dhri*) される点から解説される。然し、金属を生ずる因としての鉱石 *dhātu* は有部では同類因とされ、唯識では種子であるとされ、パーリ・アビダンマでは輪廻の苦の因とされた。

撰 *パーリ・アビダンマ* では中有を説かない。中有は *upahacca-parinivāyin* を *upapadya-p.* (生般涅槃業者) と誤解し且つガンダルバに対する信仰が変化したための所産と考えられる。北伝阿毘達磨等では中有について様々な事が論じられる。然しパーリ・アビダンマによれば、死ねば即ち次の生を受け輪廻には一瞬の間隙も無い。パーリ・アビダンマでも業は意業を中心とする。そして心作用と関連して説かれる。(*Vm.* p. 601 f.; Asl. p. 67 f.;

Abhidh-s. p. 23 f.; Nāmar-p. v. 327 f.). 心作用は十四種に分けられ、それに基づいて心は八十九種、詳しくは百二十一種に分けられる。十四心作用とは①受胎の際の結生②認識作用の無い有分③有分の流れを止め五識や意識に注意を喚起する転向④⑤⑥⑦⑧眼識等の五識による見聞嗅嘗触⑨好不好を感受する領受⑩何であるかを考察する推度⑪何であるかを確認する確定⑫善惡のの判断や善惡業の行為中や入定中の速行⑬速行の経験の強烈な時に印象づける彼所縁⑭死ぬ時の死であり、これらの心のいずれかが一定の秩序の下に常に相続している。結生・有分・死は同一の心の作用であり一生の間変らない。次生の結生心は今生の死心の直前の心と所縁を等しくする。死の直前までの心のあり方によって次生の結生・有分・死心が決定される。

有分心は屢々潜在意識として扱われてきた。あるいは、闕下 Sublimen 下意識 Subconsciousness 無意識 Unconscious 等の心理学用語が用いられてきた。然し有分心はそのような心ではない。認識に関与する他の心が生起した時には河の流れの如く無数に生起し、心が活動せず楽苦を知覚せず夢も見ずに熟睡している時の心である (Vm. p. 458; Mil. p. 299)。そして生有 uppatthi-bhava の支分 āṅga (必要不可欠の条件) として働き、業が尽きぬうちは活動を途切れさせないためのものであり、これが作用している間は寿命の継続と熱の持続とがあって身を破壊させずに保つてゐる (Vm-mht. Nāgarī ed. p. 1021; Abhidh-s-porāṇaīkā. Burmese ed. p. 308; Abhidh-s-mht Nāgarī ed. p. 62; Paramattha-dīpani Burmese ed. p. 127)。

心理学用語の闕下とは刺激があっても知覚されず意識されないだけで、睡眠中の寝言や寝返りやかゆいところをかく場合である。

下意識は現在無意識でも後で思い出すことが可能なものであり、無意識は自らの行為・感覚に気付いていないことである。所謂潜在意識は二重人格などの場合に用いられる語であるが下意識に相当する。これらの心理学用語は全て何らかの認識のある場合である。強いて探せば昏睡 Coma があるが、これは外部からの刺激によっても覚醒し得ない状態である。

有分心は心理学で扱われるものとは全く別の範疇のものである。心作用の一つに挙げられるが、実は心理作用ではなく人間の存在そのものに関するものであり、心が常に相続することを裏づける為のものである。パーリ・アビダンマでは心の断絶は無想定・減尽定の二無心定のみとする。が、有部では無心定の他極睡眠・極悶絶の場合にも心が断絶するとし、唯識宗でも無想果と二定と無心の睡眠と悶絶の場合には所依の心が損せられているので意識が起らないとし、更に泥酔の際にも前六識が断絶するとする。

パーリ仏教では律の遵守と定による修道実践を重視した。常に自己の心のあり方が問題となる為、中有の否定と有分心の存在とによって途切れることのない心相続を説いたのであり、修道重視の立場からは、熟睡や悶絶と無心定とを截然と区別したのである。パーリ・アビダンマにおいては、無常・苦・無我が強調されている。しかし、中でも特に輪廻の苦が強調されており、パーリ・アビダンマ独特の心作用論からも強い業と輪廻の思想が伺われるのである。(略語は概ね Critical Pali Dictionary の略語表に依る)

本研究は、昭和55年度文部省科学研究費一般研究Bによる研究成果の一部である。